17歳の試練 —— マレーシアの高校生活と試験

京都大学 地域研究総合情報センター准教授
山本 博之

高校生なら誰もが一度は必ず経験する人生の試練と言えば、みなさんは何を思い浮かべますか。大学入試という人がいるかもしれませんが、全員が経験するわけではありません。マレーシアの高校生に同じ質問をしたら、マレーシア教育証書(SPM)を取るためのSPM試験だと口を揃えて答えるでしょう。SPM試験は大学入試ではなく高校卒業の試験なので、全国の高校生が高校生活の最後に必ず受けなければなりません。しかも、この試験の結果によって、国費で海外の大学に留学する人、国内の大学に進学する人、専門学校に進学する人、進学せずに就職する人などに進路が分かれます。その後の自分の人生を左右する、人生で一度きりの、とてもシビアな試験なのです。SPMは全国統一試験なので成績が全てとなるはずですが、実際には成績以外の事情も加味されます。植民地時代にスズ鉱山の労働者として中国から来た華人(中国系)やゴム農園の労働者としてインドから来たインド系の人々に対して、マレー人はマレーシアに先祖代々住んでいる多数派として進学や就職での優遇が認められています。そのため、SPM試験の成績が多少悪くても大学進学や国費留学の機会が得られます。逆に、大学の数は限られているため、中国系やインド系が大学に進学するには競争率がとても厳しくなります。現在、中国系は国民の約24%、インド系は約7%で、その多くがマレーシアで生まれ育ったマレーシア国民です。中国系やインド系の中には商売で富を築いた人たちもいて、一般に富裕層だと見られていますが、実際は富裕層ばかりではありません。裕福な家庭なら私費留学させる余裕もあるでしょうが、普通の家庭で海外留学させるのは経済的負担が大きすぎ、成績が優秀でも進学を断念せざるを得ないこともあります。学校でトップになろうと必死で勉強している中国系のカーホウが、マレー人のハフィズに「お前たちはお情けで点数がもらえる」と言っている背景にはこのような事情があります。多民族社会のマレーシアでは、違う民族の人と話すときは国語のマレー語を使いますが、家庭内や親しい人の間では民族語を話します。また、イギリスの植民地統治の影響もあり、都市部には家庭で日常的に英語を使う人たちもいます。そのため、マレーシアの公立小学校は、それぞれマレー語、華語(中国語)、タミル語で教える3種類の学校があります。ただし、公立中学校では授業がすべてマレー語で行われるので、華語やタミル語で教える小学校に通った人は、中学校に入る前の

1年間、マレー語に慣れるためのクラスに通います。中学校以降、中華系・インド系とマレー人とでは学年が1つずれることになります。マレーシアの小学校は6年間、中学校は3年間、高校は2年間です。高校卒業のときにSPM試験で優秀な成績を取ると、2年間の大学進学予備課程に進みます。マヘシュもカーホウも17歳ですが、メルーは大学進学課程の2年生で18歳です。歳は1つしか違いませんが、SPM受験生のマヘシュたちと比べて、SPM試験に合格して大学進学を控えたメルーは半分大人の仲間入りです。マワルがいつも本や雑誌を読んでいるのもSPM試験があるためです。また、はじめのうちメルーがマヘシュたちのことを知らず、先生たちもメルーのことを知らないのは、メルーが通う学校とマヘシュたちが通う学校が違うためです。SPM試験を前にした高校生は、成績が悪かったらどうしようと大きなプレッシャーを感じながら、毎日必死で勉強しています。試験を受けた後は、その緊張が解け、試験結果が出るまでの束の間の自由を謳歌します。この時期は、子どもから大人になる途中の何者でもない時期に、勉強以外の様々なことを経験します。マレーシア映画には、SPM試験を目前にした少年たちの『グッバイ・ボーイズ』(2005年)、SPM試験の結果を待つ間のマレー人少女の恋物語『細い目』(2004年)、SPM試験の結果を待つ華人少年が大人の世界を垣間見る『RAIN DOGS レイン・ドッグス』(2006年)など、SPM試験の受験や結果待ちの時期を描いたものがいくつもあります。マレーシアの17歳が直面する試練はSPMだけではありません。大人になるということは、自分を守ってきた母親のもとを離れ、新たな場に自分を置くことでもあります。我が子を温かく包みこむ母親が太陽だとすれば、子どもたちは月です。月は自分で輝くことができず、太陽の光を浴びることで輝きます。しかし、太陽のそばにいる限り、月の輝きが見えることはありません。太陽から距離を置かないと月は輝けないのです。自分1人では輝けないと知りながら、それでも1人で人生の舞台に立とうとするとき、新たに得た友たちの支えを受けていっそう輝きを増すのです。